

## シノド会議を前にして若者の集い

2018年のシノド会議（世界代表司教会議）は10月3日より28日まで、ヴァチカンに世界から司教が集まり「若者、信仰、良識」と題して開かれる。そのシノド会議を前に3月19日より24日まで、若者を中心にして、その問題について討議会が開かれた。その結果は、10月のシノド会議において、司教たちによって考慮されることだろう。世界各国から、300人以上が会場に集い、言語の異なる20のグループに分かれて討議した他、インターネットを通して15,340人が参加した。

コルドバから来た26歳のガリード・サルセードは「教会側にとってはよく話を聞くこと、若者にとってはよく話すことは素晴らしい機会だ」と述べている。多くの反省、明白な要望、それは揺るぎなき教会を望んでいることだ。教会の組織を明白にし、共同体を透明性のあるものにする。さらに、人を快く迎え、正直であり、魅惑的であり、心が通い合い、近づきやすい、喜び溢れる、互いに助け合う教会でなければならない。教会はそれらをしっかりと表明しなければならない。教会はいろいろ批判されても真の姿を示すべきだ。教会は、過去に、現在に、上記したようなことと逆の誤りがあるならば、それを真に認めることに誠意を示し、誠実でなければならない。コスタ神父は「教会は一旅行会社のようなものだ。どこへも案内出来るし、何らの先入観を持たないで、話し合うことが出来るからだ」と述べ、教会にとって、今までタブーと思われていた主題を避けてはいけないという。それは、避妊問題、同性愛、性転換、墮胎問題、移民者の暖かい受け入れ、気候の変化、教会における社会における女性の尊厳などである。オーストラリア人の22歳のアンゲラ・マルカスは次のように述べている。「我々の多くはよく聞いてもらえない。だから、我々はしっかりと聞いてもらいたい、愛されたいという場所を探しているのだ。一体それは何処にあるのだ。」

3月25日の一般謁見の日、それは「棕櫚の日」であったが、多くの若者の姿がサンピエトロ広場に見られた。その若者達は法王の言葉を待っていた。宮殿の3階の窓に現れた法王は特に若者に言葉を送った。「喜び溢れる若者を操るのは難しい。若者を黙らせようとする傾向は今までずっとあった。しかし、若者よ、黙ってはいけない。年寄りや高位の者は若者を黙らせようとするが、若者よ、大いに叫び、大きな声を出すべきだ」と励ました。

## 法王は南部のパードレ・ピオが活躍したところへ

法王フランチェスコは3月17日、聖者パードレ・ピオの出身地と彼の活動地を訪問した。

この訪問は、この聖者の後継者であるという法王の思いを強固にした。それは、キリスト教徒として、最大の謙遜と苦悩する人間との接触を信条とした行いである。パードレ・ピオの出身地ピエトレルチーナを訪問する最初の法王であり、彼の活動の中心地サン・ジョヴァンニ・ロトンドを訪問する3人目の法王となった。2年前の臨時の聖年の時には、パードレ・ピオの遺体が、聖遺物として、車に乗せられ、イタリア中を回り、ヴァチカンに安置され、人々の礼拝を集めた。今回の法王の訪問の根拠となったのは、パードレ・ピオが聖痕を受けて100年、そして亡くなって50年という節目を迎えたからである。生地での

法王の話は次の通りだ。「皆さん、争ったり、口論をしてはいけない。」「祈りに繋がり、自分自身を低くし、忍耐できるようにすることだ。」そして、参会者にパードレ・ピオの行ったことを真似するように求めた。

訪問時の主な出来事を記そう。

- ①高齢者について：人生を謳歌し、長い間高遠な徳を若者に授けてきた高齢者を大事にしなければならないし、尊敬しなければならない。高齢者はノーベル賞を授けられる価値があるのだ。
- ②パードレ・ピオが聖痕をうけた楡の木の前で法王は祈りに没頭。
- ③サン・ジョヴァンニ・ロトンドの修道院訪問：その5番の部屋はパードレ・ピオが生活したところだ。祈り、苦悶し、さらに悪魔にも苦しめられた部屋だ。ベッドの他に、聖母マリアの像のあるサイドテーブル、スリッパと聖者が死の間際に使った酸素ボンベが置いてある。
- ④パードレ・ピオの遺体に、告白の時に使うマットを寄贈。これは「告白の神秘性」を表すものだ。
- ⑤教会は「良きサマリア人」を表す場所であれ。1956年5月5日にオープンしたパードレ・ピオによって作られた特別の場所、サン・ジョヴァンニ・ロトンドのイタリア全土からの幼きガン患者を収容する場所を訪れた法王は、予定より長く滞在し、続くミサの開始が遅れてしまった。
- ⑥法王は病室の一つに入った。そこにはやっと成人に達したが、この4年間ガンと闘っているミルコがいた。ミルコは法王が部屋に入るやいなや、床に膝をつけて、法王に抱きついた。顔は涙でグシャグシャだ。法王の白い衣装がその涙を拭いていた。側近がミルコの体を法王から離そうとしたが、法王はそれを制して、ミルコの納得するまでその姿勢でいた。

## 二人の法王の存在

現法王フランチェスコは、法王職を辞任したベネディクト16世に次いで、2013年3月13日にコンクラーベで法王として選出された。それから満5年が過ぎた。前法王（名誉法王）は元気で、ヴァチカン内で起居している。今までに二人の法王の対立点はなく、内面的に意思疎通の良さを示していた。しかし、このほど現法王は自分の考えを纏めた「神学書」を公刊した。それに対して、今まで沈黙を守って来た名誉法王は堪忍袋の緒が切れたのか、現法王を批判するようになった。名誉法王は現法王を教会改革の上では支持している。反対者には現法王に対する愚かなる偏見を早く捨てるように訴えている。しかし今回現法王の「神学」の本が出版されると、名誉法王から批判の声が上がったのだ。名誉法王は自らを現存する唯一最高の神学者と考えている。それゆえに、神学者ではない現法王が、名誉法王を凌駕するような内容を披露していることは、「神学者」の第一人者を自負するベネディクト16世にとっては我慢ならない、捨ておけない由々しき出来事である。ベネディクト16世は、フランチェスコ法王を学者ではなく、信仰の実践者としてとらえているのだ。教義省の長官ヘラルド・ミュラーは、ベネディクト16世によって2012年に任命されたが、教義についてベネディクト16世よりしばしば優れた助言を受けていた。そのミュラーは2017年6月現法王によって教義省の長官を解任されている。